OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 芭蕉発句「さみだれに鳰のうき巣を見にゆかむ」考 |
| Author(s) | 三ツ石, 友昭 |
| Citation | 演劇学論叢. 2006, 8, p. 53-66 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/97500 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 芭蕉発句「さみだれに鳰のうき巣を見にゆかむ」考

三ツ石　友昭

## はじめに

『あつめ句』（貞享四年成立）に載る、芭蕉の発句「さみだれに鳰のうき巣を見にゆかむ」は通常、「五月雨が降り続いています。琵琶湖はいつもより水かさが増して、浮巣もよく見えるでしょうから、さあ、見に行きましょう」と解される。ところが『笈日記』によれば、前書に「露沾公に申侍る」とあり、この発句を右のように解する限り、露沾公にこうした挨拶をする必然性は薄いと言わざるを得ない。

もっともこの挨拶の相手が露沾ではなく、例えば当時の、いわゆる第一次近江蕉門と称される尚白や千那ならば、さほど不自然さは伴わない。発句成立の貞享四年（一六八七）の翌年にあたる元禄元年、大津での俳諧に、芭蕉は尚白と一座しているからである。

その尚白ならばともかく、管見の範囲では、露沾と近江を直接結びつけるものの存在を知らない。江戸で出生した露沾は、半生を江戸で過ごし、内藤家の領国である磐城に下向後、その地で没したのであり、江戸より西の地には、関心がなかったように見受けられる。とすれば、この「鳰のうき巣」の所在を琵琶湖ではなく、別のところを想定しなければならないはずである。

本稿はこのように、「鳰のうき巣」に焦点を定め、芭蕉発句について、新たな把握を試みようとするものである。

## 一

まず露沾を中心として、内藤家について述べておくことにする。

周知のように内藤家は、数多くの藩政文書が残されていることで著名で、およそ三万点とも十万点とも言われる『内

藤家文書』は、明治大学刑事博物館、現在は明治大学博物館に所蔵される。文書の数はさておき、内藤家は江戸時代前半に磐城七万石を領有した譜代大名で、明治大学内藤家文書研究会の編纂にかかる『譜代藩の研究』などによれば、内藤家はそもそも三河の出で、初代は義清、二代は清長、三代は家長。この家長は強弓で著名で、関ヶ原の戦いの前哨戦である「伏見城の攻防戦」で戦死したが、それは京都養源院の血天井で広く知られている。家長の次が四代政長で、内藤家の初代磐城藩主は、この人物である。政長については、後で触れることにする。政長の次は忠興、そしてきわめて著名な風虎の義泰と続く。その息子が義英で、この人物が露沾である。

露沾の祖父である忠興は、幕閣などの有力な地位についたことのない内藤家歴代当主の中では珍しく大坂城代をつとめるなど、異色の存在であると言ってよい。『内藤家文書』の中の忠興の書状などによれば、この人物には戦国の気風が残っていたようで、島原の乱の戦術面で他の幕閣と意見の対立から殿中で刀に危うく手をかけそうになったり、その一方でまた細かいところもあって、日常使う紙について、前のものはよかったが今度のものはかたくて鼻紙に使えないから、もっと柔らかくして送れとか、随分細かい指示をしている。

この忠興が当主のとき、著名な明暦三年（一六五七）の江戸大火、俗に言う振袖火事が起こる。周知のように江戸では、やや大きいもので言えば、ほぼ隔年に火災が発生しており、中でも江戸時代を通して大火と称されるものはおよそ十回、小さいものまで含めると、およそ千二百回を数えるという。大火の中でもすさまじいものはもちろん振袖火事で、あまりにも大規模であったせいか、また浅井了意の『むさしあぶみ』が伝える内容が過酷であるせいか、江戸のすべてを焼き尽くしたかのような印象があるらしい。ところが実はそうではなくて、例えばこの内藤家の上屋敷は焼失していない。

内藤家の上屋敷に話が及んだので、ここでその江戸藩邸について述べておくことにする。『東京市史稿』市街篇第四十九に、次のようにある。

一、上屋敷　虎門内　麹町区三年町壱番地
　拝領天正十八年月日不詳　坪数壱万五百拾五坪
一、下屋敷　六本木　麻布区三河台
　拝領寛永六年八月日不詳　坪数九千三百六拾壱坪
一、下屋敷　渋谷
　贈與元禄八年二月廿四日　坪数一万四千五百坪

このうち内藤家江戸上屋敷（以下、上屋敷と略称する）についてはまた後で再三言及することになるが、現行の地名で言えば、千代田区霞ケ関付近にあたり、現在の文部科学省周辺に幕末まで存在した。下屋敷は、その上屋敷から目と鼻の先の六本木にあり、もう一つ下屋敷は右のように、渋谷にもあった。

話を振袖火事に戻して、この火災で焼失を免れたところについて、『東京市史稿』変災篇第四に、

炎残の所

一、西の丸の下御馬屋。
一、あへの備中守。いなば美濃守。
一、北条出羽守。
一、加賀爪甲斐守。
一、内藤帯刀。

とある。「内藤帯刀」が忠興で、このように焼失を免れたためか、忠興は粥の炊き出しを幕府から命じられる。それは『むさしあぶみ』[1]が詳しく挿絵入りで伝える。

御城中よりは、内藤帯刀、松浦肥前、岩木伊与、これらの人々を御奉行として、御成橋、新橋、日本橋、筋かひばし、増上寺前に仮屋をたて、かゆを煮させて飢人窮民に施行し給ふに、江戸中の老弱男女あつめりて給はる。

右の挿絵によれば、検分の役人がすわり、その幔幕には下がり藤の、内藤家の家紋が見える。下がり藤と言えば、露沾の内藤家は本家筋で、その分家筋の信州岩村田藩内藤家は、幕末の頃あまりに貧しくて、「金は内藤志摩守裾か

らボロ下がり藤」と揶揄される。

このような内藤家にあって、将来の藩主としての地位を約束されていた露沾は、俳壇のパトロン的存在として次第に著名になり始めた天和二年（一六八二）、いわゆるお家騒動に巻き込まれ、世子の地位を追われる。かわって異母弟の義孝が藩主となり、露沾は上屋敷を去り、六本木の下屋敷に移ることを余儀なくされる。後年磐城に下向した露沾は、息子の豊松（政樹）が藩主をついだため、五千石とも一万石とも言われる豊かさを背景に、当時の俳書出版を援助したほか、磐城を訪れる俳人も枚挙にいとまがないほどであった。ちなみに内藤家は、前述したように代々磐城藩主であったが、延享四年（一七四七）この政樹が藩主のときに、磐城から日向延岡に転封になり、その後延岡の地で明治維新を迎える。

## 二

さて標題の芭蕉発句について、潁原退蔵氏は、次のように述べられている。

> 露沾は磐城平の城主内藤風虎（義泰）侯の長子、名義英。若く隠居して俳諧に遊び、風流を楽しんだ。俳諧は宗因門であるが、芭蕉・其角等とも交渉が深かった。
>
> （中略）
>
> 「見に行かん」といふのは、どうも貴人の庭を拝見に罷出ようといふ語気には感ぜられぬ。又露沾公を誘って見に行かうなどとは、勿論言ひ得べき事ではない。よって思ふに、これは貞享四年の五月頃、すでに芭蕉は湖南・京都あたりに遊ぶ意があって、その事を露沾公に申上げたのではあるまいか。然るにそれが延びて、発足は十月になった。当時露沾公が餞の吟を送った事は、『句餞別』や『笈の小文』等によって知られる。さうすると句解もおのづから異なって来ねばならぬ。即ちこの五月雨に鳰の湖の水嵩も増したことであらうから、湖上に漂ふ鳰の浮巣を見に出かけようと、風狂の心を述べたのである。真蹟に詞書が全くないのも、特に露沾公との関係によって解せねばならぬ句ではないからであらう。詞書はたゞ露沾公の許へ暇乞にでも出た折りの句といふ程に見てよからう。

このように潁原氏は、「鳰のうき巣」は「鳰の湖」、すなわち琵琶湖であるとほぼ断定されている。

しかし冒頭にも述べたように、この句は『笈日記』にも載り、そこに「露沾公に申侍る」とある。とすれば、琵琶

湖に限定してしまわないで、例えば杜哉『芭蕉翁発句集蒙引』[2]には、

露沾公に申侍る
○五月雨に鳰の浮巣をみにゆかん
此沾子ノ園ハ山アリ水アリテ眺メモイト広シト見ユ

とあり、「此沾子ノ園」と言ってよいくらいの、もっと露沾に直接かかわる水辺が想定されてよいはずである。阿部正美氏も、その著『新修芭蕉伝記考説』で次のように根拠不十分とされており、確かに琵琶湖と限定してしまうことは、些か即断の譏りを免れないだろう。

『笈日記』と『泊船集』には「露沾公に申侍る」と前書があるので、大名俳人内藤露沾に逢った時の作と思われる。(中略)潁原博士の『新講』等に、貞享四年の五月頃芭蕉は既に湖南・京都あたりに遊ぶ意があって、その事を露沾に披露したのではないかといふ推測がある。露沾は貞享四年の旅に餞別吟を贈ってゐるし、鳰の浮巣といふ語も鳰の湖(琵琶湖)を連想させるから、この推測は尤もな点があるけれども、必ずさうと断定するには根拠が不十分である。こゝでは「あつめ句」初出たることによって、単に貞享四年夏以前と推定するに止める。

それでは琵琶湖でなければ、どの水辺なのだろうか。

檀上正孝氏は「芭蕉論序説―延宝期の『桃青』に関する考察[3]―」の中で、延宝期(一六七三～一六八〇)の江戸俳壇について、次のように三つのグループに分けた上で、解説を加えられている。

江戸俳壇の主要俳人系図

第一グループ　調和派　不朴派　蝶々子派
第二グループ　談林派
第三グループ　風虎・露沾　幽山・如流・泰徳―(維舟門)　似春・信章・桃青―(季吟門)　言水・才丸
東下の京都俳人グループ―信徳(梅盛門)・春澄(維舟門)・千春(維舟門)

第三のグループは、上方系とくに京都の維舟・季吟門につながる俳人たちである。この一派は、俳壇の大パトロンであり文学愛好の大名として知られる内藤風虎（貞享二年没、六十七才）の邸に出入りすることを許されていたので、その有利な立場を生かして、もっとも進取の気風に富んでいた。（中略）季吟門の桃青また東下してこの一派に加わった。

また、今栄蔵氏も「芭蕉年譜」[4]の延宝三年（一六七五）の項で、次のように述べられている。

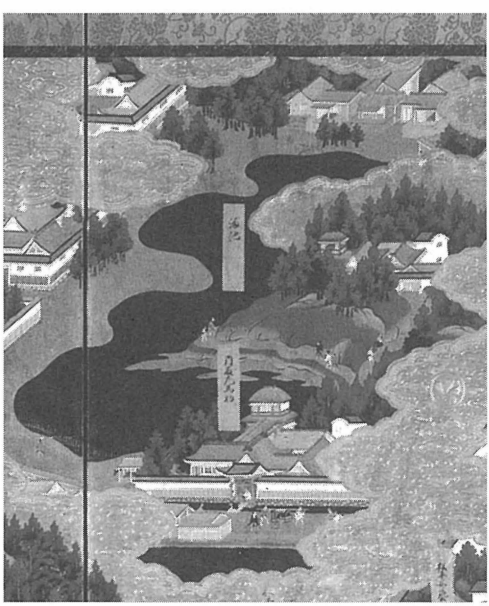
内藤露沾判『五十番句合』に発句二以上入集（芭蕉句解参考）

露沾は奥州岩城平の城主風虎の息で、父子ともに文事を好み、その江戸溜池葵橋の邸宅は当時有力文人の出入りも多かった。芭蕉もその間に交じって交渉を持つようになっていくが、これはその後の彼の文壇活動を有利にした。

このように芭蕉は延宝三年（一六七五）頃、江戸溜池葵橋の邸宅に出入りしたらしい。「らしい」と言うのは実は、芭蕉が内藤家江戸藩邸に招かれたということは、管見の範囲では、直接裏付ける資料で確認できないからである。

## 三

それでは、上屋敷の周辺に水辺があるかと言えば、左の『江戸図屏風』[5]（以下『江戸図』と略称する）に、それが見える。すなわち、上屋敷の前面に大きく広がる溜池である。内藤家の江戸上屋敷は、この『江戸図』の左隻第三扇に見え



る。上屋敷の左には五文字書かれ、上から順に「内」「藤」「左」「馬」「助」と読める。この左馬助は、前に後述を約束した政長で、あの数々のエピソードを残した忠興の父である。政長は、寛永十一年（一六三四）まで藩主だから、この『江戸図』は、寛永頃の溜池周辺を描いたものと言ってよいだろう。露沾の父である風虎も、寛文年間（一六六一～一六七二）の風景を、

江戸溜池の辺より富士を見て
溜池にうつるや富士の雪なだれ

と詠んでいる（『桜川』）。そこから富士山が見えたのだから、上屋敷はかなり風光明媚なところであったらしい。

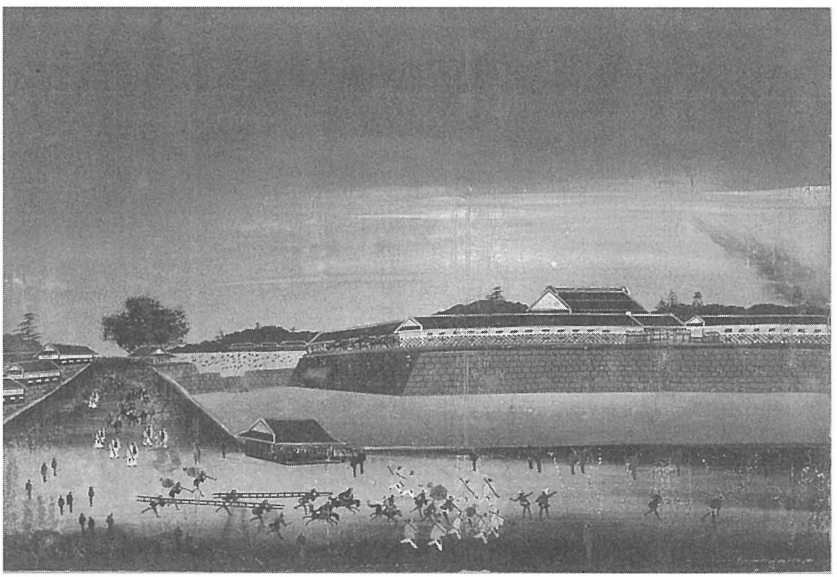
しかし芭蕉が訪れたのはこの上屋敷ではなくて、その後火災で焼失したから、やがて再建されたところを訪れたことになる。実は上屋敷は、寛永年間以降は『江戸図』の伝えるとおりであったが、前述したように運よく振袖火事では類焼を免れたものの、『東京市史稿』変災編第四によれば、左のように寛文八年（一六六八）二月一日の江戸火災で焼失してしまう。

虎御門焼上ル。御門ノ外、田中大隅殿・谷内蔵殿・同出羽殿〇衛広。内藤左京夫殿〇義泰。何れも上屋敷不レ残焼ル。

「内藤左京殿義泰」とあるのが風虎で、露沾の父にあたる。ついでに言えば、この寛文八年の火災では、二月一日に上屋敷が焼失し、その三日後には六本木の下屋敷まで焼失してしまう。ついでと言えば、次に掲げる平井聖氏監修『泥絵で見る大名屋敷』にも上屋敷が描かれる。この書は市販されていて容易に見られるもので、泥絵は、参勤交代で江戸から国元へ帰る武士の土産となったと言われるのも当然と思われるほど、この上もなく美しいものである。

この絵と同じものが、昭和十四年（一九三九）に出版された大熊喜邦氏著『泥絵と大名屋敷』には、「内藤能登守屋敷の図」とされる。大熊氏によれば、泥絵は江戸後期、それもずっと後世のものの由で、そうだとすれば、この「能登守」は天保五年（一八三四）、延岡藩主になった政義のことだと思われるから、描かれているものは、天保五年より後の上屋敷ということになる。

この絵を見ると、どうやら火災の場面を描いているようで、右側の火の見櫓の右に煙が見え、左の方向から火消しが駆けつけている。葵坂の向こうに溜池が広がり、水面には点々とした黒いものが描かれる。この黒いものについて



は後述するが、このように後世のものではあっても、芭蕉の訪れた上屋敷は、およそこういうものであっただろうと思われる。

次は、溜池について述べることにする。浅井了意の『東海道名所記』には、

山王より十五町南のかた。赤坂のふもとに、ため池あり。そのかミ江戸中の水道の源なり。今ハたば川の水道をきり流し。日本橋より南の者、これをのむ。

とある。玉川上水ができるまでは、溜池が上水道の水源であったと記されているから、きれいな水面の広がる光景であったことがわかる。

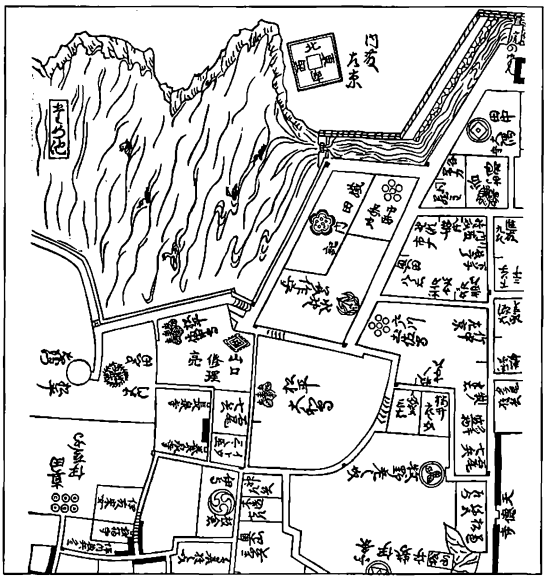
右の『東海道名所記』が書かれたときよりおよそ二十年ほど後の、延宝七年（一六七九）の「江戸方角安見図」坤を、『古板江戸図集成』第三巻により、次頁に掲げる。

「内藤左京」とあるのが露沾の父の風虎で、注目すべきは溜池であって、何種類もの水鳥が描かれる。芭蕉が延宝三年（一六七五）頃、上屋敷に出入りしたことは前述したが、そのときにこうした水鳥も目撃したと考えてよいだろう。

芭蕉の頃から半世紀ほど後の例を示すならば、『江府名勝志』には、

○溜池　赤坂御門より山王宮の後をめぐり虎御門の西迄続く、其長さ九町幅は所々同じからず。赤坂御門の方は狭し。

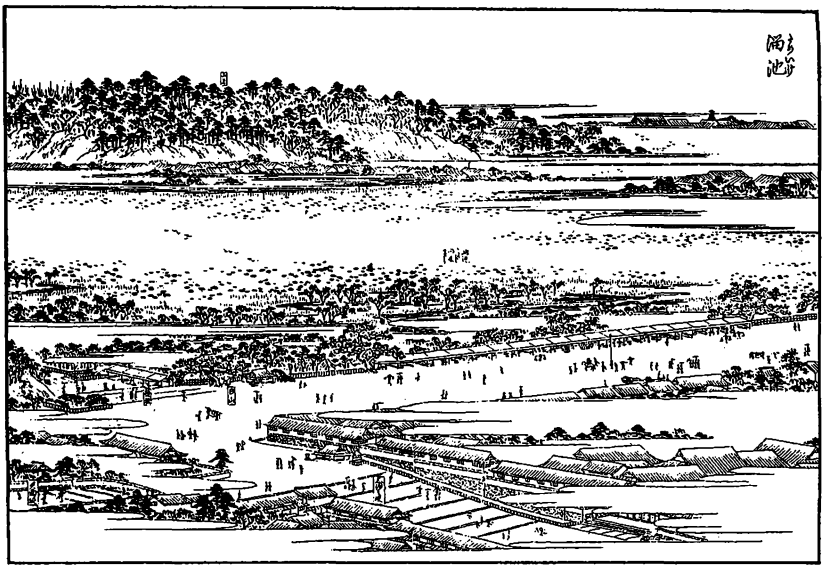
とある。赤坂御門から虎御門まで「長さ九町」というから、きわめて巨大なものである。その大きさは、『江戸名所図絵』巻之三によれば、さらにはっきりとわかる。それを『日本図会全集』第二回により、挿絵と合わせて次頁に掲げる。



溜池　赤坂御門の外より山王の宮の麓を東南へ繞る。（中略）蓮を多く植ゑられしゆゑに、夏月花の盛りには奇観たり。また、池の堤に榎の古木二、三株あり、これを印の榎と名づく。昔浅野左京太夫幸長、鈞命を奉じてこのところの水を築き止めらる。その臣矢島長雲これを司り、堤成就の後、その功を後世に伝へんため印にとて栽ゑけるとなり。

この挿絵の左下方に「白山」とあり、そこから右手前が「汐見坂」で、溜池に沿って右へ行けば、「葵坂」に出る。「溜池」の文字の下に火の見櫓が見えるが、それは前掲の泥絵に見えるものと同じと考えられるから、その付近が内藤家の上屋敷だということになる。

右の『江戸名所図絵』は、芭蕉よりおよそ百五十年ほど後のもので、その間、溜池は幕府から各大名に何度も浚渫が命じられているから、少しずつ小さくなっていたらしい。だから芭蕉のときには、『江戸名所図絵』に描かれているよりもっと大きくて、もっと美しかっただろう。また後述を約束しておいた、泥絵に描かれる溜池の水面にある点々




とした黒いものは、『名所図絵』に「蓮を多く植ゑられし」と記されているので、蓮であることが明らかである。

溜池はその後、さらに次第に小さくなり、橋がないために一度は明治初年に渡し船[6]が設けられたものの、ついには一本の溝だけになり、明治二十一年（一八八八）に埋め立てられてしまう。溜池は地上から完全に姿を消し、現在はバスストップと地下鉄の駅名だけになっている。

## 四

一方鳰については、カイツブリであることは改めて言うまでもないが、発掘報告が多くの材料を提供する。近年江戸考古学として、東京各地が調査の対象となり、数多くの報告書が提出されている。

そのうちの東京大学本郷キャンパスの地下にある、加賀藩江戸上屋敷跡の発掘調査書[7]によれば、カイツブリが出土していることが知られる。この上屋敷跡遺跡は、東京大学御殿下グラウンドとして利用されて来たため、保存状態が良好という。十七世紀後半の地層から出土したカイツブリは、どうやら食べた後のゴミとして捨てられたものらしい。現代とは違って当時、多くの種類の鳥が食べられていたようで、それほどカイツブリもまた、身近な存在であったと

言えよう。とすれば、前掲の延宝八年「江戸方角安見図」坤に見える水鳥の中にカイツブリがいたとしても、何の不思議もないだろう。

こうした発掘は、実は上屋敷でも実施され、多くの事実が明らかになった。それは、『文部科学省構内遺跡』[8]として発行されているので、ついでながら、この報告書について三点、ここで付言しておく。

その一つは、「宝暦六年（一七五六）に日向延岡藩七万石を拝領」という記述で、些か疑問なしとしない。と言うのは、この宝暦六年は内藤政陽（内藤家第十代当主）が藩主に就任したときではあっても、拝領したときではないからで、正確さを欠くと言わざるを得ない。前述したように内藤家は、露沾の息子である政樹が藩主であった延享四年（一七四七）に磐城から日向延岡に所替えを命じられたのである。

二つには、実はこの報告書でもまた、「明暦の大火」という文言が見えるのだが、そこに内藤家江戸上屋敷がこの大火で焼失したという認識が窺われることである。それを抜粋して、次に示す。

遺構の変遷

Ⅰ期　内藤家が当該地に屋敷を拝領したのは、家康の入府直後（一五九〇年）とされるが、今回の調査からも当該地周辺が江戸時代のごく初期から開発されたことを確認することができた。

（中略）

Ⅳ期　本遺構の廃絶時期は一六五〇～六〇年代と推定され、被熱した陶磁器や瓦が廃棄されることから、明暦の大火により廃絶した遺構と推定される。

前述したように、上屋敷は焼失を免れたから、「被熱」は寛文八年（一六六八）二月一日の江戸大火によるものだろう。

最後に三つには、同報告書に載る「江戸御上屋敷絵図」である。『内藤家文書』中のこの絵図は、恐らく学術的な刊行物に紹介されるのは初めてのことではないだろうか。同報告書の見解によれば、明和七年（一七七〇）から同九年の間に書かれたものという。そうだとすれば、芭蕉が訪れたときからおよそ百年後の上屋敷の様子ということになる。もちろんこの屋敷が幕末まで存続することはなく、絵図の描かれた直後の明和九年（一七七二）二月、これも江戸大火の一つである目黒行人坂の火災で、烏有に帰してしまう。

## 五

発掘資料はともかくとして、話を芭蕉発句に戻すと、『三冊子』（白雙子）によれば、芭蕉自身はこの句について、

春雨の柳は全体連歌なり。田螺取る烏は全く俳諧なり。五月雨に鳰の浮巣を見にゆかん、といふ句は、詞に俳諧なし、浮巣を見にゆかん、といふ所俳なり。

と言う。これについて阿部正美氏は『芭蕉発句全講』Ⅱで、

五月雨の中をわざわざ鳰のうき巣を見に行こうという「心」（意味、内容）が俳諧

と述べられている。また能勢朝次氏は『三冊子評釈』で、

「見に行かん」といふ所に、風雅に狂ずる風狂の気味が色濃く出てゐる為に、俳諧となり得た

と述べられている。確かに芭蕉以前には、和歌にせよ連歌にせよ、少なくとも鳰の浮巣を見に行くことを面白がることはなかっただろう。

『連珠合璧集』上には、

雑イ

鳰とアラハ。（鳰のうきすは夏也。）

下道。通路。玉もにすむ。あそふ。あしま。あふみの海。おき中川。水の関。

とあり、鳰からの連想は「下道」や「通路」にとどまって、見物に出かけることなどあり得ない。それはアトランダムに抽出した、次の何首かの和歌を瞥見しただけでも、容易に首肯できる。

ともすれば鳰の浮巣のうきながら水隠れ果てぬ世を歎くかな　（『兼好法師集』）

水の上に鳰のうき巣のうきながらすめばすまるるあはれ世の中　（『千歳和歌集』）

したにこそかよひしものをいかにしてにほのうきすのうき名立つらん　（『同右』）

はかなしや風にただよふ波の上ににほのうきすのさても世にふる　（『同右』）

たのむぞよ鳴のうき巣のうきながら下の通の絶えぬ

ばかりを　（『新拾遺和歌集』）

いとど猶したにやかよふ池水のにほのうき巣もかつこほりつつ　（『新続古今和歌集』）

『無名抄』は、鳰の浮巣について「建春門院北面歌合」における エピソードを伝える。

子を思ふ鳰の浮巣のゆられ来て捨てじとすれや見隠れもせぬ

「此歌珍し」とて勝ちにき。祐盛法師、是を見て大きに難じて云、「鳰の浮巣の様を知られぬにこそ。彼の浮巣はゆられ歩くべきものにあらず。（中略）されども、其座に知れる人のなかりけるにこそ勝に定められにければ、いふかひなし」とぞ申し侍りし。

こうして和歌は、実物を見に行くことなく「その場にいて」詠むからこそ、ともすれば誤りをおかすことにもなるのである。

「その場にいて」詠むことなく、わざわざ出かけて行くところに俳諧が成立することは明らかだから、それが俳諧性と言ってよいだろうし、その意味でまさしく芭蕉は、俳諧性の具現者にほかならない。

## おわりに

以上のように本稿は、芭蕉発句「さみだれに鳰のうき巣を見にゆかむ」について、この「鳰のうき巣」、とりわけその所在に焦点を定めて、新たな把握を試みようとしたものである。

芭蕉の挨拶の相手である露沾は、将来の藩主の地位を約束されていたにもかかわらず、お家騒動に巻き込まれ、退身して六本木の下屋敷に移ることを余儀なくされた。露沾にとって溜池は、言わば近くて遠い故郷になったのである。

一方芭蕉は江戸に出て後、幾度となく訪れた壮大な大名屋敷の一つがこの上屋敷であって、当然その前面に広がる、巨大な溜池を眺めただろう。それが江戸市中を離れ、一介の世捨て人となって、露沾不在の上屋敷からは、もはや溜池を眺めることはできなくなったのである。

このような両者にとって共通する最も身近な水辺は溜池であって、芭蕉発句は琵琶湖ではなく、以前に風雅をともにした、風光明媚な溜池を念頭に置いたものだろうするのが妥当だと考える。

## 注

（1）『日本随筆大成』第三期第六巻による。明暦の大火についての記述は、実に正確、かつ詳細をきわめる。

（2）復本一郎・茶山鈴代両氏稿「翻刻・荒砥本『芭蕉翁発句集蒙引』その二」（静岡女子大学『国文研究』第一三号、昭五三年三月）による。この書は、優れた注釈で知られる。

（3）『国語教育論考』第二集、昭四〇年五月。後に日本文学研究資料叢書Ⅰ再録。延宝期の江戸俳壇における芭蕉の位置を論じたものとして、定評がある。

（4）『校本芭蕉全集』第九巻、評伝・年譜・芭蕉遺語集。ただし同じ今氏による『芭蕉年譜大成』には、この『五十番句合』入集には触れているものの、上屋敷出入りについての言及は、一切見あたらない。

（5）諏訪春雄・内藤昌両氏編著『江戸図屏風』による。大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館に所蔵される。インターネットでも見られるなど一般に広く公開されているが、管見の範囲では内藤家にかかわって、この資料が取り上げられたことはない。

（6）寒川鼠骨・林若樹両氏編著『其角研究』によれば、大正八年（一九一九）七月二十六日午後四時から寒川鼠骨氏宅で開かれた第十回其角研究会の席上、内藤鳴雪氏が「明治維新後までも、彼処を渡つたことを、私もおぼえてゐます。文久銭一文で」と述べられている。

（7）『東京大学本郷構内遺跡　山上開館・御殿下記念館地点』第三分冊考察編（東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書四）平三年一〇月。出土したカイツブリについては、

> 上腕骨近位骨端で、しかも骨頂部を欠く断片であるが、両端の割れ口は新しい。しかし、骨端に近い骨幹部の特徴的な低い三角形を呈する形（中央の稜線が強い）はカイツブリ類の特徴である。ハジロカイツブリのようなやや大型のものと思われる。

と解説されている。

（8）文部科学省構内遺跡調査会『文部科学省構内遺跡』平一六年三月。本書は発掘記録のほか、出土遺物の自然科学的分析、それに史料による遺跡の変遷など、その内容は多彩をきわめる。なお同地では現在、高層ビルに建て替えるべく工事中である。

付記

本稿は、俳文学会第五十七回全国大会（平成一七年一〇月九日、松山東雲女子大学）における口頭発表にもとづくものである。貴重な御教示を賜わった先生方に厚く御礼申し上げる。なお、本稿は直接演劇とは関係のない内容であるが、現在準備中の俳諧と能をテーマにした学位論文の一部をなすものである。